



「快男児」の面影

文化庁長官官房 審議官 辰野裕一

児玉源太郎の存在と事跡が今日においても広く知られているのは、司馬遼太郎氏の『坂の上の雲』によるところが大きい。本作に描かれた、日露戦争の作戦指導のため自ら望んで内務大臣から参謀本部次長に降格したこと、乃木將軍を助けた二百三高地攻略での鮮やかな指揮ぶり、戦争終結に向けての明断と迅速な行動などの数々の場面は、それまであまり知られていなかっただけに、とりわけ新鮮で強い印象を江湖に与えた。

ペリー来航の前年に生まれ、日露戦争終結の翌年に死んだ児玉源太郎の五十五年の生涯は、日本が近代化に向けてかけのぼった、この『坂の上の雲』の時代にびたりと一致する。

この間、軍人そして政治家としての才能を縦横に発揮した児玉は、日露戦争に肝腦を捧げ尽くし、その突然の死は、戦死ならざる戦死と惜しまれた。チャールズの著名な評伝に「人が時を得、時が人を得た」という言葉があるが、日清戦争での川上操六とならび、日露戦争での児玉源太郎はまさにこれにあたるといえよう。

この児玉源太郎を一言で評すれば、英雄豪傑というよりは、むしろ「快男児」がふさわしい。拔群の切れ味の頭脳と軍事的才能はもとより、名利にとらわれない出処進退と明朗快活で茶目っ気に富む人柄は、児玉の印象をすこぶるさわやかで魅力あるものとしている。この写真画報臨時増刊「児玉陸軍大将」の発行は、児玉の死後わずか二週間。

このことから、児玉源太郎がいかに国民から哀惜される存在であったかが分かる。徳山のマツノ書店が、今回、満を持して復刻するこの画報により、われわれは、『坂の上の雲』の時代を駆け抜けた一個の快男児の面影を臨場感あふれる時代の雰囲気とともに味わうことができる。日露戦争百年の記念の年にふさわしい意義ある出版として大いに歓迎したい。



写真画報臨時増刊第壹巻第拾三編

児玉陸軍大将

日露戦争百年記念 マツノ書店復刻版

博文館發行

■このところ児玉源太郎の人気は高まる一方ですが、逆にその史料は全国の古本屋を探しても、どこにもありません。
■児玉源太郎は旅順攻撃における作戦ばかり有名ですが、台湾総督としてもその教育・文化・産業の発展にめざましい業績を残しています。台湾における日本の評価が今でも高いのはそのためです。
■本誌は今から九十九年前の八月、児玉源太郎の急逝後わずか二週間で、明治期を代表する版元・博文館から刊行された「写真画報臨時増刊」です。
■珍しい写真はもとより、大臣から女将まで、当時の彼の周辺にいた人たちの証言も多く、今では入手できない児玉に関する生の資料の宝庫といえましよう。
■本誌は国立国会図書館、都内の公立図書館をはじめ、山口県内の主な図書館のどこにもなく、児玉源太郎出生の地にある小さな古本屋が「日露戦争百年」として復刻するものです。
■この珍しい雑誌を提供して下さった、萩市の特別学芸員・一坂太郎氏に、この欄を借りて厚く御礼申し上げます。

■体裁 B5判箱入一四〇頁
■定価 二千円(千三〇〇円・税込)
■発売 平成十七年七月二十日
▼電話一本、代金後払にて直送致します。
▼直販につき、書店では購入できません。
山口県周南市銀座2-13
0834-295
マツノ書店
URL <http://www.matuno.com>

寫真叢報 兒玉陸軍大將目次

明治三十九年八月五日發行

● 寫 真

- ◎ 兒玉源太郎卿 (アトハバシ)
- ◎ 故兒玉大將と其一族 (同上)
- ◎ 戦地參謀部の兒玉大將 (同上)
- ◎ 平服の兒玉大將 (同上)
- ◎ 兒玉大將の筆蹟
- ◎ 陣中の閑院宮殿下と兒玉大將
- ◎ 兒玉大將と恩賜の名馬
- ◎ 最近の兒玉大將
- ◎ 馬上の兒玉大將と繪葉書の筆蹟
- ◎ 手澤と風采
- ◎ 兒玉大將邸の前後
- ◎ 兒玉大將の葬儀 (其二)
- ◎ 同上 (其二)
- ◎ 同上 (其三)
- ◎ 同上 (其四)

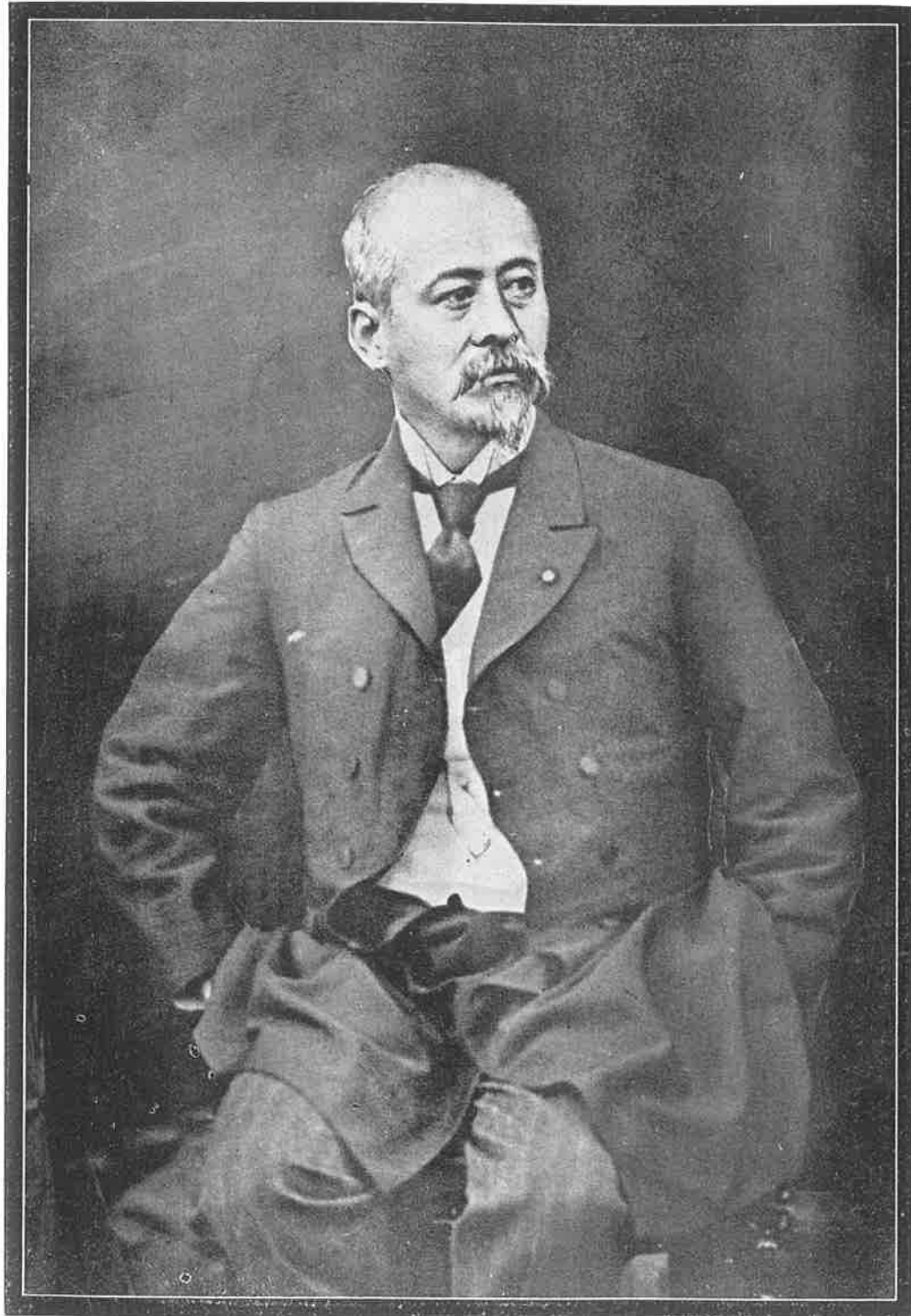
- ◎ 青山の葬儀場
- ◎ 靈柩祭場に著す
- ◎ 青山墓地に英魂を葬る
- ◎ 出征前の兒玉大將と帝國の精華
- ◎ 諸將の笑顔を見よ
- ◎ 滿洲軍總司令部の兒玉大將
- ◎ 兒玉大將奉天に入る
- ◎ 在奉天總司令部の兒玉大將
- ◎ 凱旋前日在奉天の兒玉大將 (其二)
- ◎ 同上 (其三)
- ◎ 凱旋途上の兒玉大將 (其二)
- ◎ 大連埠頭の兒玉大將
- ◎ 凱旋途上の兒玉大將 (其二)
- ◎ 英風颯々兒玉大將
- ◎ 兒玉大將東京に凱旋す
- ◎ 東京市の凱旋軍大歓迎

● 讀 物

- ◎ 臺灣總督府と兒玉大將
- ◎ 臺北の總督官邸 (其二)
- ◎ 同上 (其三)
- ◎ 臺灣總督官邸と後藤民政長官
- ◎ 臺灣臺北城の名殘
- ◎ 兒玉總督時代の臺灣經營 (其二)
- ◎ 同上 (其三)
- ◎ 澎湖島守備兵
- ◎ 兒玉大將の英斷
- ◎ 臺灣に於ける治績の一斑
- ◎ 治化普く蕃地に敷く
- ◎ 生蕃我に服す
- ◎ 治化普及
- ◎ 臺北郵便電信局
- ◎ 土人亦兵とすべし
- ◎ 臺灣嘉義の兵營
- ◎ 山を穿ち水を渡る
- ◎ 臺中師範學校の講堂
- ◎ 北港公學校の女子部

- ◎ 兒玉大將傳 淺田江村
- ◎ 兒玉大將追懷談 三並生
- ◎ 兒玉大將月旦 國府東
- ◎ 大將の幼年時代 天溪生
- ◎ 大將參謀の生涯 岸上賢軒
- ◎ 政治家としての兒玉大將 坪谷水哉
- ◎ 兒玉大將と圖書館 坪谷水哉
- ◎ 故將軍の平生 秋生
- ◎ 大將邸の應接室外 紫草生
- ◎ 兒玉大將の家庭 琴溪子
- ◎ 噫!!! 兒玉大將 天風生
- ◎ 兒玉大將の葬儀 見聞子
- ◎ 藤園將軍逸話 見聞子

將 大 玉 兒 の 服 平
GENERAL KODAMA NOT IN UNIFORM.



矮軀疎髪、眼光閃として人を射る。

自筆なり。兒玉陸軍大將絶代の偉才を抱いて物故せらる、哀悼の情何ぞ堪えん、されど其英魂は永久に帝國の守護たらむ。左記、男爵兒玉源太郎の七字は故大將の

男爵兒玉源太郎

爵子級一功等一勳位二正將大軍陸長總謀參故
卿 郎 太 源 玉 兒

THE LATE GENERAL VISCOUNT KODAMA, CHIEF OF THE GENERAL STAFF OFFICE.



Photo Maruki TOKIO, J

Japan has been deprived of an able strategist and great administrator by the death of General Kodama. The caligraph in this picture is his own hand.

軍人として、また政治家として、兒玉大將の事蹟は、世間を擧げて最早之を知らざる者無し、而かも大將が更に意を國民教育と社會風教の上より、意を圖書館の設立にまで注がれ、獨力之を設立し、而して軍國最も多忙の時に在ても尙ほ一念は此等の方面にも注ぎて止まざりし事蹟は、世に之を知らざる人々多かるべければ、今は此事に就きて親しく知る所を叙すべし。

明治三十五年頃と覺ゆ、兒玉大將は、其の郷里なる周防の徳山町に於て、公共の爲に圖書館を設立し、兒玉文庫と名けられたり。當時聞く所によれば、大將は其頃或る功勞により御下賜を蒙りたる金員をば、盡とく此の圖書館に供し内外古今の圖書を集めて、郷黨子弟の爲に閱覽せしめんとの意に出づと。

大將の圖書館設立の擧を聞き、大橋博文館主は、自家出版の圖書數十種を寄贈したれば、其の用件を帯びて、余は牛込薬王寺前町の兒玉大將邸を訪ひしことあり。時に大將は痛く圖書の寄贈を喜ばれ、例の輕快なる調子を以て、「イヤ

兒玉大將と圖書館

水 哉 生

其れは誠に辱けない。他方の本願で、大分方々から貰ひました。二階に駢べて置いたから、チヨツと御目に懸けませう」と、自ら先きに立ち、直ちに二階に案内せらるゝと、階上には、新たに架棚を設けたり、または卓上に排列したりして、諸家より寄贈の圖書を陳列せられ、中には古書にして甚だ高價なるものも多く、殊に巻物、または帙と爲りたる古法帖や古文書も數多あり。時に大將は一々案内しながら、「私の文庫を設くる徳山と云ふ所は、田舎だから、圖書館と博物館と兼帯で、讀む本ばかりで無く、此んな風に、法帖でも古文書でも、獲るに随つて皆な陳列して置く積りで御座います。ドウも地方の邊僻な所では、若い者が本を讀みたいと思ひましても、買ふ便利が無く、また實際買ふことが出来ても、新聞の廣告ぐらひを信用して買ふと、實物を見て失望する様なこともある。で、此等の讀書家の爲に、古今の圖書を集めて見せて遣りたいと思ふて、丁度私の住んだ跡を直ぐに文庫にして、之を陳列する積りでス、けれども何分獨力で本を集めて、其數は知れたものだが、幸はひに世間から、此の企だてを賛成して、種々な本を寄贈して下さるので、御覽の通り大分集まりましたから、近日中に第一回の發送をします積りです。マア郷里の爲めに、何か公益になることをと考がへたが、此の圖書

例 言

藤園兒玉將軍、一夜忽焉として去る、世を擧げて愕然たり。渾身の精力、彼の如く絶綸にして、一代に雄視せる者、倏忽、如斯くにして長逝せむとは、何人も思設けざりし所也。

彼、公人としては、近世帝國主義の權化たり、帝國主義の高潮に達せる茲數年間の日本は、宛も彼の爲に造られたるかの觀あり、少くとも我帝國主義は、彼の行く處に活躍したり、而して其活躍する所、皆な善からざるなかりき。

彼、私人としては、明治豪傑の活ける典型たり、東洋男兒の眞骨頂は遺憾なく、彼によりて代表せられ、世界は彼によりて亞細亞人中の亞細亞人を解し得たり。

出でては縦横の機鋒、亂麻を斷ちて向ふ所敵なく、入つては落々の風骨、洒然として一點の陰影を留めず。其公私生涯の多角、多面なる。其現在に用ゐらるゝの重く、其將來に求めらるゝの厚き、彼の如くなる者、現代又た幾人ありや。

噫、斯人去つて今や亡矣。故人を想ふて轉た落莫の嘆に禁えざる也。乃はち特に斯卷を編して、永しへに斯人の雄姿を偲ばむと欲する所以。併せて斯人一代の偉業を紀念せむと欲する也。

明治三十九年八月

博文館編輯部同人

■本誌の25頁に及ぶ広告は「日露戦史」第13巻までの全目次をはじめ、巖谷小波著「少年日露戦史」全16冊の目次、海軍省御認可「日露海軍写真集」、「日本歴史宝鑑」、「全国旅行案内地図」「軍艦詳説」「旅順籠城実談」「武士道家訓集」「羅馬史論」「ネルソン傳」他22点、今では得難く、また読み応えのある貴重な資料となっています。これらの版元がすべて博文館であるのも驚きです。